

## 飛鳥に來た西域の吐火羅人

西本昌弘

はじめに

日本と西域の關係をうかがわせる文物は、たとえば正倉院宝物のなかにも多数存在し、隋や唐を介した兩地域の交流が想定されている。初唐の時代に相当する六五四年、日本の日向国に吐火羅国の男女と舍衛の女とが漂着し、その後も同様の漂着が海見嶋(奄美大島)にあった。彼らは筑紫を経由して、当時の王宮があった飛鳥に送られ、朝廷あげての歓待を受けた。この吐火羅人(靚貨邏人)をめぐっては、古くから議論が闘わせられており、日本の古代史学界ではタ伊の墮和羅国にあてる説が通説化している。また、人口に膾炙された説として、ペルシア人説も唱えられている。

しかし、これまでの研究では、中国史料が墮和羅や波斯(ペルシア)と区別して詳述している吐火羅(靚貨邏)の分析をほとんど行っていない。そのような遠い国から日本まで来るはずがないという判断があったからである。しかし、近年における中央アジア史研

究の進展により、この地域の歴史的変遷が解明されつつあり、七世紀中葉における唐およびイスラムのトハリスター進出の様相も明らかになってきた。本稿では、こうした研究成果を踏まえて、主として中国史料にみえる吐火羅・靚貨邏の検討を行うことで、飛鳥に來た吐火羅人(靚貨邏人)が西域トハリスターンの吐火羅人であったことを述べてみたい。

なお、同時に來朝した舍衛人については、祇園精舎のある中インドの舍衛国(シュラヴァステー)の人とみるのが通説であり、私もこれに異論はないので、通説に従って論述することとする。

### 一 日本古代の吐火羅・舍衛關係史料

吐火羅人や舍衛人が古代の日本に漂着したことは、以下に掲げる『日本書紀』などの史料が語っている。

①『日本書紀』白雉五年(六五四) 四月条

吐火羅国男二人・女二人、舍衛女一人、被風流來于日向、

## ②『日本書紀』 齊明三年（六五七） 七月条

秋七月丁亥朔己丑（三日）、觀貨邏国男二人・女四人、漂泊于筑紫、言、臣等初漂泊于海見嶋、乃以馭召、

辛丑（一五日）、作須弥山像於飛鳥寺西、且設孟蘭盆会、暮饗觀貨邏人、或本云、墮羅人、

## ③『日本書紀』 齊明五年（六五九） 三月条

丁亥（一〇日）、吐火羅人、共妻舍衛婦人來、

甲午（一七日）、甘檮丘東之川上、造須弥山、而饗陸奥與越蝦夷、此云柯之、川上、此云箇播羅

## ④『日本書紀』 齊明六年（六六〇） 七月乙卯（一六日） 条

高麗使人乙相賀取文等罷歸、又觀毗羅人乾豆波斯達阿、欲歸本土、求請送使曰、願後朝於大国、所以、留妻為表、仍與數十人、入于西海之路、

## ⑤『日本書紀』 天武四年（六七五） 正月丙午朔条

大学寮諸学生・陰陽寮・外葉寮、及舍衛女・墮羅女・百濟王善光・新羅仕丁等、捧菜及珍異等物進、

## ⑥『令集解』 職員令、玄蕃寮条

頭一人、掌仏寺、僧尼名籍、供濟、蕃客辞見、饗饗送迎、及在京夷狄釈云、謂墮羅・舍衛・蝦夷之類、除朝聘外、蕃人亦入夷狄之例、古記云、在京夷狄、謂墮羅・舍衛・蝦夷等、又説、除朝聘外、在京唐人等、皆入夷狄之例、

①によると、孝德天皇の白雉五年（六五四）四月に、吐火羅国の男二人・女二人と舍衛の女一人が暴風に遭遇して日向に流れ来たった。彼らの乗った船が遭難し、日向国の海岸に漂着したのである

う。②では、齊明天皇の三年（六五七）七月己丑（三日）に、觀貨

邏国の男二人と女四人が筑紫に漂泊している。彼らは「臣らははじめ海見嶋に漂泊した」と証言したという。海見嶋とは奄美大島のこ

とである。朝廷は馭馬によつて觀貨邏国人たちを召した。彼らは七月辛丑（一五日）までには飛鳥の都に入ったよう、一五日、飛鳥寺の西に須弥山の像を作つて、孟蘭盆会を催し、暮れ方に觀貨邏人を饗宴でもてなした。『日本書紀』の分注によると、「觀貨邏人」の

ことを「墮羅人」と表現する史料もあつたらしい。觀貨邏人のためにわざわざ須弥山像を作り、孟蘭盆会を催しているのは、彼らが仏教徒であつたからであろう。③によると、齊明天皇の五年（六五九）三月丁亥（一〇日）にも、吐火羅人が妻の舍衛婦人ともに来朝した。

その一週間後の三月甲午（一七日）には甘檮丘の東の川上に須弥山を造り、陸奥と越の蝦夷に饗宴を催している。

こうして飛鳥に到着した吐火羅人たちのうち男性たちは、齊明六年（六六〇）七月に帰国の途についた。④によると、觀毗羅人の乾豆波斯達阿が本土に帰ることを希望して、朝廷に送使を要求した。彼は「願はくは後に大国（やまと）に朝さん。所以に妻を留めて表

となす」と述べ、数十人の一行で西海の路に入った。のちにまた日本へ戻つてくると称して、人質として妻たちを日本へ残し、九州をへて西方へ帰つていったというのである。

以上①～④の史料については、井上光貞氏が明快な解釈を加えている。<sup>①</sup>すなわち、①と③には「吐火羅」と「舍衛」がみえ、②と④

には「親貨（貳）邏」と表記されているので、①で日向に流来した吐火羅人が③で飛鳥に到着し、すでに②で到着していた別の親貨邏人の一行と合流したものとみる。また、④にみえる「靚貳邏人乾豆波斯達阿」は吐火羅人の首領であり、彼は妻を日本に残して帰国するのであるから、この首領と妻が③の「吐火羅人」と「妻舍衛婦人」に相当するといえるのである。さらに、④で「西海の路に入る」というのは、遣唐使の吉士長丹を「西海使」とも称していることから（『日本書紀』白雉五年七月条）、唐に送られたことを意味するといふ。井上氏の解釈はいずれも卓見であり、これに従いたいと思う。このように孝徳天皇の白雉末年から斉明天皇の時代にかけて、西暦の六五四年から六五九年までの間に、日本の九州近海に吐火羅人・舍衛人が漂着し、飛鳥の朝廷に迎えられたが、一行の男性たちは六六〇年に中国方面へ帰国していったのである。

日本に残留した吐火羅人の女性の姿は⑤にみえている。天武四年（六七五）正月元日に大学寮の学生、陰陽寮・外寮寮および舍衛の女、墮羅の女、百済王善光、新羅の仕丁らが、菓と「珍異等物」を捧げて、天武天皇に進上した。後世の正月元日における供御菓儀の濫觴とされる儀式に、舍衛の女と墮羅の女が参加し、天皇に菓と「珍異等物」を献上しているのである。ここにみえる墮羅の女が吐火羅の女をさすことは、前掲した史料②に親貨邏人のことを墮羅人ともいうとあることから、また墮羅の女と舍衛の女が並んで現れていることから明らかであろう。

墮羅の女と舍衛の女が元日に「珍異等物」を献上しているのは、彼らが漂着時に携行していた品物を差し出したとも考えられるが、漂着からすでに二〇余年が経過しているので、新たな品々が大陸方面から供給されていた可能性を示唆する。吐火羅人の男子が妻だけを残して中国方面へ帰国していったのは、よく考えると不可解な行動であるから、彼らが帰国を願ったときに、「願はくは後に大國（やまと）に朝せん」と述べているのは、意外に本心を語ったものとみられるのではないか。吐火羅人たちが貿易商人の一行であったとすると、女性たちを残して帰国すると宣言することで、送還船の便宜をはかってもらえるばかりか、残留する女性たちが日本において交易の準備を整えることができるからである。

そのような目でみると、史料⑥の記載も興味深い。玄蕃頭の職掌として大宝令が挙げる「在京夷狄」の実例として、古記は墮羅・舍衛・蝦夷などを掲げており、奈良時代の天平年間においても、平城京に居住する異民族として墮羅人と舍衛人が例示されているのである。大宝令制定時を想定した注釈とすると、藤原京に居住していた異民族ということになる。墮羅人・舍衛人は大陸方面から「珍異等物」を調達し、藤原京や平城京において交易に従事していた可能性がある。その意味では、記録に残る吐火羅人の来朝は斉明朝前後のみであるが、少なくとも奈良時代初期までは、吐火羅人の貨物を載せた船舶が筑紫などに往来していたことが想像されるのである。

## 二 吐火羅に関する研究史

それでは、吐火羅人（靺貨邏人）とはどのような地域に居住する人々をさすのであろうか。吐火羅に関する研究史を回顧すると、以下のようなになる。

### ① 西域の吐火羅説

『大日本史』は『隋書』を参照して、吐火羅国は「在隋国西」と説き、『書紀集解』は孝徳紀の吐火羅国の注釈として、『隋書』西域伝や『唐書』西域伝にみえる吐火羅の記事を引用している。<sup>②</sup>『日本書紀通釈』もほぼ同様で、さらに『大唐西域記』の靺貨邏の記事を追加している。<sup>③</sup>古くは文字通りにとって西域の吐火羅とする説が行われていたことがわかる。その後、井上光貞氏によるタイの墮和羅国説が通説化してからも、内田吟風氏は『日本書紀』の吐火羅人は文字通りアフガニスタンよりの商民か旅行者とみて差し支えないと論じている。<sup>④</sup>

### ② 南西諸島の吐噶喇列島説

谷川士清『和訓栞』は『日本書紀』にみえる吐火羅を薩摩の洋上にある島にあて、<sup>⑤</sup>『薩隅日地理纂考』は吐火羅は七島中の宝島であるとする一説を紹介している。<sup>⑥</sup>『鹿児島県史』も宝七島説に従っている。<sup>⑦</sup>藤田元春氏は吐火羅は疑いもなく今の吐噶喇であると述べる<sup>⑧</sup>

<sup>⑨</sup>丸山二郎氏は申叔舟の『海東諸国紀』の地図をみると、九州と琉球との間に「渡賀羅」という島があるから、この渡賀羅島（宝島）を吐火羅に擬することができるといふ。<sup>⑩</sup>

しかし、井上光貞氏が批判するように、<sup>⑪</sup>吐火羅にあてられる宝島は奄美大島の北二〇kmほどの場所に位置するので、宝島の住人が奄美大島に漂着したとしても、そこから故郷の宝島に自分で帰るのは容易であったはずである。彼らをはるばる筑紫さらに大和に送り届けられ、七年後にわざわざ朝廷の送使に送られて帰還するというのはいかにも奇怪なのである。吐噶喇列島説には成り立ちがたい矛盾があるといえるだろう。

### ③ フィリッピン説

三宅米吉氏は吐火羅はタガロであろうとして、フィリッピン群島のルソン島にあるタガロ人に擬定した。<sup>⑫</sup>吉田東伍氏も吐火羅をルソン島にあてている。<sup>⑬</sup>しかし、吐火羅⇨タガロだけが理由というのは、根拠薄弱であるといわざるをえない。

### ④ ビルマの驃国説

竹内理三氏は、西域の吐火羅人は海すら知らないような人種であるから、マレー半島をめぐるほどの大航海を企てうとは思えないとして、『新唐書』南蛮伝にみえる驃国（ビルマのイラワジ河下流域）を吐火羅にあてた。<sup>⑭</sup>驃国は「自ら突羅朱と号し」、すぐその

上流に舍衛が位置するから、舍衛人を同伴して来朝した吐火羅人の条件に合うという。しかし、舍衛との地理的な近さや自称以外に、驃国を吐火羅にあてる根拠はなく、自称の「突羅朱」にしても吐火羅の音と似ているとは思えない。驃国説には積極的な論拠があると考えられない。

#### ㉔ タイの墮和羅国（ドヴァーラヴァティ）説

井上光貞氏は、吐火羅をタイのメナム河下流地域の墮和羅（ドヴァーラヴァティ）に比定した<sup>15</sup>。この墮和羅国説は『日本書紀』の注釈書や日本史辞典類にもそのまま引用され、日本古代史の世界では通説化している<sup>16</sup>。吐火羅＝墮和羅説の根拠は以下の通りである。

㊶ 吐火羅は文字通り解すれば、ウズベク共和国のボハラにあたり、アム川の河源地帯であるが、こんなに遠いところの人々がはたして日本にやって来れたものであろうか。

㊷ ドヴァーラヴァティには墮和羅・独和羅・墮羅鉢底など濁音ではじまる表記と杜和羅・吐和羅鉢底など清音ではじまる表記の両方があるが、これは墮羅とも吐火羅とも表記する『日本書紀』のトカラと一致する。一方、西域の吐火羅・靺貨邏の頭音はいずれも清音であって、濁音のものはない。

㊸ 『旧唐書』南蛮伝、墮和羅条には、貞観十二年（六三八）にその王が遣使して方物を貢じ、同二十三年（六四九）にもまた遣使して、象牙・火珠を献じたとあるが、両度の遣使年次は『日

本書紀』にみえる吐火羅人の漂着年次とはなはだ接近している。墮和羅国から唐への第三次の遣使を想定すれば、その一行が海上で暴風におそわれ、日本に漂着したものとみて矛盾はない。

井上氏の論拠のうち、㊶は主観的な判断であるにすぎない。内田吟風氏は当時の吐火羅・唐間の交通状況を考えれば、西域から来唐した吐火羅人の漂着もありえないことではないと論じている<sup>17</sup>。㊷については伊藤義教氏の批判がある<sup>18</sup>。すなわち、井上氏が依拠した山本達郎氏の研究によると、杜和羅・杜和羅鉢底の「杜」は「ド」であり、吐和鉢底の「吐」は「杜」の誤りであるから、杜和羅の頭音はすべて濁音であることになり、清濁混在説は成り立たないのであるという。

㊸については、井上氏が史料にみえない墮和羅から唐への第三次遣使を想定していることが問題である。『冊府元龜』卷九七〇、朝貢三などによれば、墮和羅（独和羅）国からの入唐使は、六四〇年前後から六六〇年代までに限れば、六三八年・六四九年・六六二年の三度来朝している。これに対して、西域の吐火羅国から唐へは、後述するように、六三九年・六四五年・六四七年・六四八年・六五〇年・六五四年・六五七年・六六〇年の八度にわたって使者が派遣されている。使節の派遣にともない、商人の往来も活発化したとすると、六五〇年代に日本に漂着した吐火羅人は、その年代に中国へ来朝したことが確認できない墮和羅国の人とみるよりは、西域の吐

火羅国の人とみる方が穏当であると思われるのである。

『冊府元龜』が吐火羅国と墮和羅国とを区別しているように、中国文献では吐火羅国と墮和羅国とはまったく別の国として認識されていた。『大唐西域記』巻一〇は葱嶺西方の靺鞨国（吐火羅国）とは別に、インド東方諸国の一つとして「墮羅鉢底国」を挙げている。六七一年に中国の広州を出航し、六九五五年に洛陽に帰り着いた義浄が著した『南海寄帰内法伝』では、天竺の那爛陀（ナーランダ）の東方にある国々の一つとして「杜和鉢底国」が挙げられ、南海諸国の薬物に関連して「杜和羅」に言及する一方、「然北方諸胡、靺鞨及速利国等」として、靺鞨と速利国（ソグド）が北方諸胡として紹介されている。ここにも見える靺鞨がソグディアナ南方のトハリスタンをさすことは明らかであろう。㉔の吐火羅＝墮和羅説は通説の位置を占めるが、中国史料をも合わせ考えれば、その説得力は意外に乏しいことが知られるのである。

### ㉕ 西域の波斯人（ペルシア人）説

ペルシア人説に大きな影響を与えたのは松本清張氏である。松本氏は、トカラは西域の吐火羅のことで、現在のアフガニスタンであるとしながら、ここはペルシアと中国を結ぶルートにあたり、ペルシア人が居住し、また彼らがここから中国に移ったと述べ、乾豆波斯達阿の波斯はペルシア人をさすから、ペルシア系の人間が斉明朝に渡来したとみた。<sup>20</sup> この松本説をうけて吐火羅＝ペルシア人説が輩

出することになる。石原力氏は、トカラ国はアフガニスタン北部からウズベク共和国に近い地域とし、ここはササン朝ペルシアの版図であったから、インド洋廻りの中国航路により、斉明朝にペルシア人が漂着したという。<sup>21</sup> 井本英一氏は、靺鞨を中央アジアのトカラ国とし、乾豆波斯達阿の波斯達阿はペルシア人ダーラーを意味するので、中央アジアのペルシア人ダーラーが斉明朝に渡来したと考えている。<sup>22</sup> 伊藤義教氏は、トカールスタンのペルシア人ダーラーが、ササン朝の回復策を探る目的で長江下流域から出航したが、大風に遭って日本に漂着したと説く。<sup>23</sup>

以上四氏の説は、吐火羅を中央アジアのトカールスタン地域と考える点で、上記㉔の西域の吐火羅説と共通するが、斉明朝の日本に漂着した吐火羅人をペルシア人とみる点で、西域説とは一線を画する。ペルシア人とみる根拠は、吐火羅がササン朝ペルシアの版図であったとか、乾豆波斯達阿の人名中にペルシア人を意味する「波斯」を含むとかいうことであるが、七世紀中葉の吐火羅がササン朝ペルシアの版図であったというのは、後述するように正確な認識ではない。また、乾豆波斯達阿という名前にしても、「波斯」はペルシアを意味するものとは限らない。仏典に波斯匿王や優波斯那という人名がみえるように、<sup>24</sup> 波斯は字音を表す文字として用いられたにすぎないのである。ペルシア人説には賛同者も多いが、<sup>25</sup> 『魏書』以降の中国正史をはじめとして、玄奘の『大唐西域記』や慧超の『往五天竺国伝』などはいずれも、吐火羅（靺鞨）と波斯を明確に区

別しているのです、トカラ人をペルシア人と同一視するのは妥当ではないであろう。

### ④スマトラ・ジャヴァ説

榎一雄氏は、スマトラ・ジャヴァには七世紀末からシュリーヴィジャヤ王国が繁栄し、両海域を結ぶ商業活動の中心となったことから、プトレマイオス『地理』にみえるタコラとジャヴァを吐火羅と舍衛にあてた<sup>26)</sup>。短文のため意を尽くしていないが、説得力に乏しいといわざるをえない。シュリーヴィジャヤ(室利仏逝)国は義浄が滞在したことと有名であるが、前述したように、義浄は『南海寄帰内法伝』においてシュリーヴィジャヤ国とは異なる、北方の胡国を靺鞨と表現していることも反証となる。

以上、吐火羅国に関する研究史を振り返ってきた。日本の古代史学界では井上光貞氏の墮和羅説が通説化しており、ペルシア史研究者を中心にペルシア人説が唱えられているが、いずれもその根拠に乏しく、再検討の必要であることが確認できたと思う。『日本書紀』にみえる吐火羅人については、西域のような遠いところから日本までやって来ることはいかならうという主観的な判断はひとまずおいて、日本文献以外の中国文献などでは、吐火羅がどのように表現されているのかを考察する必要がある。また、七世紀中葉のアジア情勢を検討した上で、西域の吐火羅と唐との関係が急接近した時期がなかったかどうかを見極めることも重要であろう。そこで

以下、中国史料を中心に、西域の吐火羅に関する史料を順次見てゆくことにしたい。

### 三 吐火羅の位置と境域

吐火羅とは中央アジアのアム川(オクソス川)中上流域地方をさす。現在のアフガニスタン北部・東北部、ウズベキスタン南部、タジキスタン南部、トルクメニスタン東南部などを含み込んだ地域にあたる。サンスクリット仏典などではトカリ・トカラ、中国仏典・正史などでは吐火羅・靺鞨羅・靺鞨邏、ペルシア・イスラム史料などではトハリスターンと呼ばれた。この地域には紀元前にギリシア人の植民都市としてバクトリア王国が建設された。バクトリアは漢文史料にみえる大夏である。『史記』大宛伝などによると、匈奴に追われた大月氏が西方へ移動し、大夏を臣属させたという。その後、大夏の五翁侯のうちの貴霜が優勢となり、貴霜王と号して周辺諸国を併合した。いわゆるクシャン朝であり、この時代にガンダーラを中心に仏教文化が開いたことは有名である<sup>27)</sup>。

五世紀にクシャン朝の勢力が衰えると、エフタル(嚙嚙)がこの地域に勢力を伸ばした。さらに五六〇年代になると、エフタルに代わって突厥が中央アジアに侵入し、トハリスターンの支配者となった。玄奘がこの地域を訪れたとき、吐火羅諸国が西突厥に臣属していたことは後述する通りである。遊牧民と定住民の生活域が交差する中央アジアにおいては、定住民である各城邑の支配者が遊牧

民の支配者に役属するというのが一般的であった。<sup>28)</sup> トハリスターン全体を政治的に統合する定住勢力は存在せず、大月氏・クシャーン・エフタル・突厥などの遊牧民が、順次この地域に進出しては、各城邑を配下に収めていったのである。<sup>29)</sup>

トカラ国の名は四世紀末頃から仏典に姿をみせはじめ。道安(三二二―三八五)の『増一阿含經』序には「有外国沙門曇摩難提者、兜佉勒国人也」とあり、この人物が前秦の建元二〇年(三八四)に長安に来て、訳経に従事したことを述べる。また、三八三年に僧迦跋澄が漢訳した『鞞婆沙論』卷九に「兜佉勒人」「兜佉勒語」とみえ、五世紀初頭に羅什が訳した『大智度論』卷二五に「兜佉羅小月・修利・安息・大秦国等」とある。この頃のトカラには仏教信仰の高まりがあり、訳経僧を出すなどして、その存在が中国にも知られるようになっていったのであろう。なお、「兜佉羅小月」とあるのは、トカラと月氏との関わりを示しており、その次に掲げられた「修利」はソグドをさすのであろう。

中国の正史においてはじめてトカラの名がみえるのは『魏書』である。『魏書』西域伝(『北史』西域伝)には、

吐呼羅国、去代一万二千里、東至范陽国、西至悉万斤国、中間相去二千里、南至連山、不知名、北至波斯国、中間相去一万里、国中有薄提城、周币六十里、城南有西流大水、名漢樓河、土宜五穀、有好馬、駝、驪、其王曾遣使朝貢、

とあり、吐呼羅国の境域が、東は范陽国に至り、西は悉万斤国に至

り、南は名前不詳の連山に至り、北は波斯国に至ると示されている。桑山正進氏によると、東限の范陽は苑湯の誤写で、苑湯は拔特山城(バダフシャーン)なる苑湯州をさし、南限の連山はヒンズークシユ山をさすという。そして北限と西限とは入れ替わっているので、誤りを補正して、北限は悉万斤(サマルカンド)、西限は波斯(ペルシア)と考えられるという。<sup>30)</sup>

また、その国都である薄提城はバルフとするのが通説であったが、桑山氏はエフタル統治下の吐火羅国都は、『周書』嚙唵国伝にみえるエフタルの拔底延城や『旧唐書』地理志にみえる嚙唵部落の所治たる活路城と同地で、アム川から南に二〇〇里離れたバグラーンに比定できるとする。<sup>31)</sup> なお、「其王曾遣使朝貢」というのは、『魏書』高宗紀、和平元年(四六〇)一二月条に「吐呼羅国、遣使朝獻」とあるのに対応する。当時の吐呼羅はエフタルが支配していたので、中国に遣使したのもエフタル人の統治者であったとみるべきであらう。

次に『隋書』西域伝によれば、吐火羅国は葱嶺(パミール)の西五百里に都し、挹怛(エフタル)と雑居し、都城は方二里の規模をもつ。勝兵一〇万人を擁し、その俗は仏を奉じているという。また、大業中に遣使朝貢したとあるが、『隋書』煬帝紀、大業一一年(六一五)正月甲午朔条では、突厥以下の二六国が遣使朝貢した記事のなかに吐火羅もみえている。『隋書』裴矩伝には、煬帝が東都を造営すると、西域諸蕃が多く張掖にいたり、中国と交易したた

め、その事務を担当した裴矩は、来朝した諸商胡から諸国の風俗や地理を聞き取り、『西域図記』三巻を編纂して奏進したとある。この本は西域の四四国を三道に分けて叙述したが、吐火羅はそのうちの南道に分類されている。隋代には西域と中国との交易がさかんとなり、諸商胡が多く往来していたことがわかる。

貞観元年（六二七）に唐を出発し、同一九年（六四五）に帰国した玄奘は、『大唐西域記』に親貨邏国（吐火羅国）のことを詳しく記述した。まず巻一では、宰利（ソグド）地方から鉄門（デルベントの西方）までを叙述したのち、親貨邏国の全体像を述べている。

出鉄門、至親貨邏国、旧曰吐火羅国、訛也。其地南北千余里、東西三千余里、東阨葱嶺、西接波刺斯、南大雪山、北挹鉄門、縛菊大河、中境西流、自数百年、王族絶嗣、酋豪力競、各擅君長、依川挾險、分為二十七国、画野区分、總役属突厥、（中略）而諸僧徒、以十二月十六日、入安居、三月十五日解安居、斯乃挹其多雨、亦是設教隨時也、

親貨邏（吐火羅）の地は南北千余里、東西三千余里あり、東は葱嶺（パミール）、西は波刺斯（ペルシア）、南は大雪山（ヒンドゥークシユ山）、北は鉄門でそれぞれ画される。縛菊大河（アム川）が国中を西へ流れている。ここ数百年來、王族は絶え、酋豪が競合している。二七国に分かれ、総じて突厥に役属している。僧徒たちは二月一六日から安居に入り、三月一五日に安居を解く。

『大唐西域記』巻一はこのあと、呾蜜国から掲職国までの一六国

をあげたのち、親貨邏国の境を出て梵衍那国（バーミヤン）に至るとする。次に巻一二では、安罽羅縛国から達磨悉鉄帝国までの一三国をあげ、いずれについても「親貨邏国故地」であると注記している。この一三国は玄奘が帰路に通過した親貨邏諸国であろう。巻一の一六国と巻一二の一三国を合わせると二九国となり、巻一に「分為二十七国」とあるのと合わないが、桑山正進氏によると、巻一にみえる一六国中の銳秣陀・胡寔健・呾刺健の三国は縛喝国西南の遠国であり、トハリスターンからは除外すべきなので、残りは二六国となり、一国足りない計算になるといふ。

以上を要するに、『大唐西域記』所載の親貨邏国は、東をパミール、北を鉄門、西をペルシア、南をヒンズークシユ山で限る境域をもち、要するにパミール以西で、北にソグディアナ、西にペルシア、南にバーミヤンを控える地域であったことになる。これは『魏書』西域伝にみえる吐呼羅の領域とほぼ一致し、中国からみた伝統的な吐火羅（親貨邏）の範囲を明示しているといえるだろう。桑山正進氏は、親貨邏国の北境はザラヴシャーン山脈、南境はヒンズークシユ山脈であると、現在のバルフ辺りが親貨邏国のもつとも西の地方にあたると説いている。<sup>34</sup>

それでは親貨邏国の首都はどこにあったのであろうか。『隋書』によると、吐火羅国の都城は方二里の規模をもち、パミールの西五百里に位置したというが、『通典』边防九には、吐火羅の都は「葱嶺の西五百里、烏澹水の南に在り」とある。桑山正進氏によると、

玄奘は『大唐西域記』において、この都城のことを「活国」と呼んでいるという。<sup>(35)</sup>『大唐西域記』巻一二にみえる活国の記述は以下の通りである。

活国、親貨邏国故地也、周二千余里、国大都城周二十余里、無別君長、役属突厥、<sup>(主)</sup>上地平坦、穀稼時播、草木荣茂、花果具繁、(中略)多信三宝、少事诸神、伽蓝十余所、僧徒数百人、大小二乘、兼功综習、其王突厥也、管鉄門已南诸小国、遷徙鳥居、不常其邑、

活国の大都城は周囲二〇余里あるというので、隋代の都城より規模が拡大している。突厥に隷属し、その王は突厥である。土地は平坦、気候は順調で、穀物・草木・花果が実る。仏教信者が多く、一〇余箇所の伽藍があり、数百人の僧徒がいたという。トハーン・ヒサールの中心地にふさわしい豊かなオアシス国家であったことがうかがえる。この活国はアスカニスタンのクンドゥズにあてることが通説であるが、桑山氏はさらに場所を限定して、アム川南岸、クンドゥズ河口地帯のカラ・イエ・ザールにあるバーサー・ヒサール遺跡を活国にあて、この地こそが親貨邏の都城跡であるとしている。<sup>(36)</sup>

#### 四 突厥・唐・イスラムと吐火羅

七世紀初頭の内陸アジアは突厥帝国の支配下にあった。突厥は五八三年以来、東突厥と西突厥に分裂しており、トハーン・ヒサールは西突厥の支配下にあった。東突厥は六三〇年に瓦解し、唐に内付す

ることになるが、西突厥は六一七年頃に即位した統葉護可汗の時代に発展を遂げた。『旧唐書』突厥伝下には、北は鉄勒を并せ、西は波斯を距ぎ、南は罽賓に接し、ことごとく帰服せしめ、騎射兵は数十万にして、西域を覇有し、王庭を石国(タシケント)の北の千泉に移したとある。西域諸国の王には頡利発を授け、吐屯一人を遣わして監視し、その征賦を督さしめた。<sup>(37)</sup>

天竺へ向かうため長安を出発した玄奘は、高昌国王麴文泰の紹介状を持参して、西部天山北麓の素葉城において西突厥の統葉護可汗に謁見し、その援助によりソグディアナをへてトハーン・ヒサール(吐火羅)の活国に達した。『大唐大慈恩寺三藏法師伝』巻一によると、活国には統葉護可汗の長子咄度設がいて、統治を行っていたが、玄奘到着時には病床にあった。咄度設は梵僧の誦呪で回復するが、前妻の子の委嘱を受けた年若い妃に毒殺され、前妻の子が特勤を篡奪し、新しい設となった。天竺からの帰途に活国に入った玄奘は、「葉護」を自称する「葉護可汗孫王」にまみえた(同伝巻五)。この孫王こそ咄度設を暗殺させて、新たな設になった人物である。また、西突厥の統葉護可汗自身も、玄奘と謁見した直後の六二八年八月前後に、伯父の莫賀咄によって暗殺されている。その後、西突厥では統葉護可汗を殺して即位した莫賀咄侯屈利俟昆可汗つくものと、フェルガナに逃れていた統葉護可汗の息子咄力特勤を乙毘鉢羅肆葉護可汗としていたたくものとに分裂し、複雑な抗争が繰り広げられた。これによって、西域諸国や鉄勒はことごとく西突厥

に反旗を翻し、西突厥国内もおおいに虚耗したと、『旧唐書』突厥伝下は伝えている。

この間に唐は西域に進出し、六四〇年に高昌国を滅ぼして、その地に西州を置いた。六四八年には焉耆・龜茲を従え、安西都護府を龜茲に置いた。西突厥の葉護阿史那賀魯は唐の龜茲征討軍の誘導に功績があったため、六四八年に部落を率いて庭州に内属し、唐の覇権を認めた。しかし、唐太宗が死去した後の六五一年、その子啞運とともに部衆を率いて西方へ逃れ、西域諸部を領有して、唐に反旗を翻すと、西域諸国も多く賀魯に帰属したため、唐の西域支配体制は一頓挫をきたすことになる。

これに対して唐は、前後三回にわたって征討軍を派遣し、六年後に西突厥の賀魯に勝利した。六五七年に派遣された蘇定方・蕭嗣業らは賀魯を追いつめ、石国の蘇咄城でこれを捕らえ、長安へ護送したのである。阿史那賀魯の敗北によって、西突厥の西域支配は終焉を迎え、唐は吐火羅などの西域諸国と直接の交渉をもつこととなった。ただし、この頃には吐火羅の近傍にイスラム勢力が迫っており、西域諸国は大きな試練に直面していた。

七世紀初頭に勃興したイスラム勢力は、シリア・イラクを席卷し、六四二年のニハーワンドの戦いでササン朝ペルシア軍を撃破し、ここにササン朝は事実上滅亡した。ペルシア皇帝ヤズディギルド三世は東方へ走り、吐火羅へ逃れる途中、メルブ付近で暗殺された。<sup>38)</sup>『新唐書』波斯伝によると、その子卑路斯(ピローズ)は吐火羅に入っ

て難を免れ、唐に遣使して救援を要請した。高宗は遠きをもって謝絶したが、たまたま大食(アラブ)が囲みを解いて撤退したという。アラビア側の史料によると、イスラム軍は第二代カリフのウマル在世中(六四四年以前)にアム川南岸のトカラに達し、六五四年頃にはアム川を越えて、ソグディアナのマーイムルグ(米国)に侵入した。<sup>39)</sup>六五一〜六五二年にはイスラム軍がムルガブ流域でトハリスターン軍の抵抗にあい撤退している。<sup>40)</sup>六五〇年前後にはイスラム軍がトハリスターンとソグディアナに迫ったため、吐火羅国は防備体制を固めていたのである。

中国史料にみえる吐火羅国と唐との通交関係を、七世紀に限って一覧表にすると、表1のようになる。これを見ると、吐火羅国からの入貢は貞観九年(六二六)・貞観一三年と行われたあと、貞観九年(六四五)からは連年のように唐へ使節が派遣された。吐火羅国の使節は多くの場合、康国・安国・石国などソグディアナ諸国の使節や滅亡した波斯の使節と同年に入唐していることが注目される。これら諸国は吐火羅国を中心に結束してイスラム勢力の脅威を訴え、唐に助力を要請したのではなからうか。

そして、『冊府元龜』卷九六六、継襲一には、

吐火羅国、唐永徽三年、列其地为月氏府、以其葉護阿史那烏湿波、为都督、

とあり、永徽三年(六五二)には、吐火羅国に月氏都督府が置かれ、吐火羅葉護阿史那烏湿波が都督に任命されている。これを先述した

表1 吐火羅国と唐との関係史年表

年 月	記 事	出 典
太宗 貞観 九(六二六)・五	吐火羅、遣使来朝、方物を貢す	『冊府』朝、『唐会要』九九
貞観一三(六三九) 是歳	西突厥・吐火羅・康国・安国・波斯、相次いで遣使朝貢す	『旧唐書』太宗紀
貞観一九(六四五)・正	吐火羅葉護・沙鉢羅葉護・康国、遣使来賀し、各方物を貢す	『冊府』朝
貞観二一(六四七) 是歳	石・波斯・康国・吐火羅、並びに遣使朝貢す	『旧唐書』太宗紀
貞観二二(六四八)・正	吐火羅・康国・波斯・石国、並びに遣使朝貢す	『冊府』朝
高宗 永徽 元(六五〇)・五	吐火羅、遣使し、大鳥を献す、これを駝鳥という	『旧唐書』高宗紀、『冊府』朝
永徽 三(六五二)	吐火羅国を月氏府となし、その葉護阿史那烏湿波を都督となす	『冊府』朝
永徽 五(六五四)・四	罽賓・固曹国・康国・安国・吐火羅国、並びに遣使朝貢す	『冊府』朝
顯慶 二(六五七)・正	吐火羅国、師子を献す	『冊府』朝
顯慶 三(六五八)・五	西域平らくを以て、康国及び吐火羅等の国に遣使分往し、その風俗・物産及び古今廢置を訪わしむ	『唐会要』三六
	西域都督府一六を置く	『資治通鑑』
顯慶 四(六五九)・九	石・米・史・大安・小安・曹などの国に州県府を置く	『資治通鑑』
顯慶 五(六六〇)	吐火羅国の(阿史那)烏湿波、子伊室達官弩を遣して朝貢せしむ	『唐会要』九九、 『太平寰宇記』一八六
龍朔 元(六六一)・六	吐火羅・嚙唃・罽賓・波斯など一六国に都督府八を置く	『資治通鑑』
咸亨 二(六七二)・五	吐火羅・波斯・康国・罽賓国、各遣使来朝し、その方物を貢す	『冊府』朝
永隆 二(六八二)・五	大食国・吐火羅国、各遣使、馬及び物を献す	『冊府』朝
	吐火羅、金衣一領を献す。上受けず	『旧唐書』高宗紀

〔備考〕記事欄の国名は論述に必要なものを適宜抜き出したものである。出典欄の『冊府』朝は『冊府元龜』卷九七〇、朝貢三を、『冊府』朝は同書卷九六六、繼襲一をさす。

六五〇年前後の状況と照らし合わせると、イスラム軍の侵略に苦しむ吐火羅葉護が、唐から軍事援助を引き出すために、唐への接近策をとり、唐の羈糜支配下に入ったことが読み取れるであろう。

唐が西突厥を従えて西進する一方、イスラム軍がササン朝ペルシアを滅ぼして東進してくる状況のなかで、両者の間にはかなり広い緩衝地帯が広がっていた。それが吐火羅である。吐火羅を支配する吐火羅葉護はイスラム軍に対して頑強に抵抗し、容易に屈服しなかった。その理由について前嶋信次氏は、吐火羅国および吐火羅葉護が熱心な仏教信者であったためとみている。<sup>⑫</sup> 従うべき見解であろう。八世紀前半、すでにイスラム軍に征服された吐火羅国を通過した慧超は、その時代においても、

国王・首領及百姓等、甚敬三宝、足寺足僧、行小乘法、と伝えている（『往五天竺国伝』）。仏教はトハリスターンでは八世紀前半まで信仰されていたのである。こうした宗教的な理由もあって、吐火羅葉護は仏教を保護する唐に心を寄せ、その軍事的援助を期待したのであろう。

『資治通鑑』巻二〇〇、唐紀には、①顕慶三年（六五八）、②同四年（六五九）、③龍朔元年（六六一）の三度にわたって、西域に州県を設置したことが記されている。

①顕慶三年（六五八）一月条

阿史那賀魯既被擒、（中略）其所役属諸国皆置州府、西尽波斯、

並隸安西都護府、四鎮都督府、州三千四、西域都督府十六、州七十二、

飛鳥に來た西域の吐火羅人

②顕慶四年（六五九）九月条

詔、以、石・米・史・大安・小安・曹・拔汗那・悝怛・疏勒・朱駒半等国、置州府百二十七、

③龍朔元年（六六一）六月癸未条

以吐火羅・嚙唃・罽賓・波斯等十六国、置都督府八、州七十六、  
県二百一十一、軍府二百二十六、並隸安西都護府、

④では、六五八年に西突厥に役属していた西域諸国を、西域都督府に属する一六国に分け、州七十二を置き、いずれも安西都護府に隸属させた。⑤では、六五九年に西域の石・米・史・大安・小安などの諸国に一二七の州府を置いた。⑥では、六六一年に吐火羅・嚙唃・罽賓・波斯などの十六国を八つの都督府に分け、七六州・一一一県・一二六軍府を設置して、いずれも安西都護府に管隸させた。

西域における唐の州府設置が三度にわたって記されるのは、この間の顕慶四年（六五九）末に思結闕俟斤都曼の反乱が起こり、唐の西域経営に障害が生じたためであるとされる。<sup>⑦</sup>しかし、この時期にはイスラム軍が西域に深く侵入していたので、イスラム軍との一進一退の攻防を反映して、州府設置が何度も記されている可能性もある。顕慶三年には西域平定をうけて、使者が康国・吐火羅国などに派遣され、その風俗・物産などが『西域図志』六〇巻にまとめられた（『唐会要』巻三六、『新唐書』芸文志）。

『旧唐書』地理志三、西域十六都督州府条には、

龍朔元年、西域諸国、遣使來内属、乃分置十六都督府、州八

十、県一百一十一、軍府二百二十六、皆隸安西都護府、仍於吐火羅國、立碑以紀之、

とあり、龍朔元年（六六一）に西域諸國に一六都督府を置き、これを紀念して吐火羅國に碑を立てたという。『旧唐書』地理志三には、つづいて一六都督府の名称などが列挙されているが、その冒頭が吐火羅國に置かれた月氏都督府である。

月氏都督府 於吐火羅國所治遏換城置、以其王葉護領之、於其部内分置二十四州、都督統之、

月氏都督府は吐火羅國治の遏換城（クンドウズ付近）に置かれ、都督となつた吐火羅葉護がこれを領したというが、前述したように、同様の体制はすでに永徽三年（六五二）に成立していた。

『新唐書』地理志七下、西域府条でも、龍朔元年に王名遠を吐火羅道置州県使となし、于闐から波斯までの西域一六國に都督府を置いたと記される。しかし、これはいわば机上の編成で、実際には各地の王に一片の文書を与えたもの<sup>45</sup>にすぎなかつた。六五六―六六一年の間、イスラム國家は第一次内乱期にあたり、各地でアラブ支配に対する反乱が起こつて<sup>46</sup>いた。西域に唐の羈糜支配が及んだのは、こうしたイスラム國家の間隙を縫つたもので、一時的なものにすぎなかつたとみられる。

唐が王名遠を吐火羅道置州県使として西域に派遣し、吐火羅國にとくに紀念碑を立てたことは、唐の葱嶺以西の西域支配が吐火羅國を拠点に行われ、吐火羅國のみに留まるものであつたことを示して

いよう。逆にいえば、吐火羅葉護の強い要請を受けて、唐は王名遠を吐火羅へ派遣したのであり、唐の影響力は葱嶺以西では吐火羅國にのみ及んだといわねばならない。中国史料では六六一年に唐が西域に広範な支配を樹立したように書かれているが、当時のイスラム軍の動きをも勘案すると、ことはそれほど単純ではなく、イスラム軍と吐火羅國との長い戦いのなかであつて、一時的に唐の軍事的援助が功を奏したものと解されるのである。

月氏都督府管下の州は『旧唐書』に二四、『新唐書』に二五とあるが、これは『大唐西域記』にみえた覩貨邏國の二七國（二六國）と近い数字である。玄奘が訪れた覩貨邏國の範囲がそのまま月氏都督府とされ、西突厥の王族である阿史那氏が吐火羅葉護として従来通り統治したのであつた。六六〇年代初頭の唐の西域支配は広範かつ永続的なものではなく、唐の援助を受けて吐火羅國の西域支配が一時的に回復しはするものの、やがてイスラム軍の再攻勢の前に葱嶺以西の西域諸國は次々に下つてゆくことになるのである。

このように転変する吐火羅國の歴史のなかにあつて、六五〇年代は唐との関係が一躍強まった時代であるといえる。唐へは連年のように使節が派遣され、六五二年には吐火羅葉護が月氏都督に任命された。月氏都督の体制は少なくとも六六一年まで継続する。使節の往来にともなつて、吐火羅の商人らも数多く唐へ向かつたことであろう。六五四年・六五七年などに日本へ漂着したのは、唐へ向かつたこうした胡商の一団の一部であつたと推測されるのである。

## 五 吐火羅と仏教

吐火羅国が大月氏国やクシヤン朝の領域に存在した国であったことは前述した。クシヤン王国ではカニシカ王の時代に仏教保護政策がとられ、ガンダーラを中心に西域仏教の発展が促された。<sup>47</sup>二世紀の中頃以後、安世高・支婁迦讖・支亮・支謙・康孟詳・康僧鎧などの西域僧が次々に中国へ来て、布教や訳経に活動し、仏教は急速に中国人の間に広まった。安は安息（バルティア）人、支は大月氏の人、康はソグド人であることを示している。中国仏教の伝道者には天竺僧よりは胡僧が多く、訳経も梵本よりは胡本に基づいた初期には、ほとんど中央アジア仏教の支配的影響下にあったといわれる。<sup>48</sup>支婁迦讖は大月氏僧で、後漢の靈帝代に漢土に来て、はじめて大乘經典を伝えた。その弟子の支亮も大月氏仏教を伝えた。支謙は大月氏国の出身であるが、後漢靈帝代に祖父が同郷人数百人を連れて後漢に帰化した。その後、後漢末の騒乱を避けて支謙は呉へ移り、呉主孫権のもとで『維摩詰経』『大般泥洹経』など二七経を翻訳した。以上は大乘經典であるが、大月氏国より小乗仏教の僧祇尼羯磨と戒本が伝えられたというので（『比丘尼伝』巻一）、大月氏仏教には小乗の要素も存在していたことが確認できる。<sup>49</sup>

トカラ国僧として最初に名前が知られるのは曇摩難提である。曇摩難提は兜佉勒国の人。幼時に出家して三蔵を閲し、『増一阿含』『中阿含』を暗誦した。遠く流沙を渡って東遊し、前秦の建元二〇

年（三八四）に長安に至った。道安らとともに義学の僧を集めて翻經に備えた。難提は『中阿含経』を口誦し、竺仏念が翻じて五九巻とし、ついで竺仏念とともに『増一阿含経』を訳した。後秦の建初六年（三九一）二月、姚昞のために『阿育王息壞目因縁経』一卷などを訳した。その終焉の地などは不明である。<sup>50</sup>

唐代に入ってから、吐火羅から中国に来た仏教者として知られるのが弥陀山（寂友）であり、『開元釈経録』巻九に、

沙門弥陀山、唐言寂友、親貨邏国人也、幼小出家、遊諸印度、遍学経論、於楞伽俱舍、最為精妙、志弘像法、無悞郷邦、杖錫而遊、來臻皇闕、於天后代、共実又難陀、訳大乘入楞伽経、後於天后末年、共沙門法藏等、訳無垢浄光陀羅尼経一部、訳畢進内、辞帝帰邦、天后厚遺、任帰本国、

とある。弥陀山は親貨邏国の人で、唐名を寂友という。幼少で出家し、印度各地を遊学して、楞伽と俱舍に精通した。則天武后の時代に、于闐僧の実又難陀とともに『大乘入楞伽経』を訳出し、のちに法蔵らとともに『無垢浄光陀羅尼経』を訳した。その後、本国へ帰ったという。弥陀山のことには『入楞伽心玄義』巻八にもみえており、法蔵自身が実又難陀の帰国に触れて、次のように記している。

尋奉勅、令再訳楞伽、文猶未畢、陀<sup>51</sup>駕入京、令近朝安置清禪寺、龔訳畢、猶未再勘、三蔵奉勅帰蕃、至長安二年、有吐火羅三蔵弥陀山、其初曾歷天竺廿五年、備窮三蔵、尤善楞伽、奉勅、令共翻経沙門復礼法蔵等、再更勘訳、

すなわち、実叉難陀は則天武后の勅命を受けて、長安の清禪寺において『入楞伽心玄義』の訳出を進めていたが、鹿詠を終えた段階で帰国してしまった。そこで、長安二年（七〇二）になって吐火羅三蔵の弥陀山に勅命を下し、法蔵らとともに『入楞伽心玄義』を再勘訳させたというのである。藤善眞澄氏によると、清禪寺における『入楞伽心玄義』の訳出は、則天武后の最初で最後の長安行幸の際に行われたもので、法蔵らは武后の駕に随って長安へ移動したことが分かるという。また、弥陀山が則天の末年に法蔵らと訳出したという『無垢浄光陀羅尼経』も、おそらく清禪寺における訳経の成果に違いないと論じている。<sup>①</sup>

なお蓮池利隆氏は、弥陀山が訳出した『無垢浄光陀羅尼経』が、仏塔を修復することによりバラモンが命を長らえ、死後には極楽世界に生まれたという因縁を説いた上で、古塔の修理や小塔（泥・軋・石などで作る）の製作を勧める内容をもつ点に注目し、アジナハテペヤヒシュトハテペなど中央アジア周辺の仏教遺跡から粘土製の仏塔模型が出土する背景には、こうした經典の存在があったと指摘している。<sup>②</sup> 加藤九祚氏によると、タジキスタン南部にあるアジナハテペは、七世紀後半から八世紀前半にかけて機能した仏教僧院の遺跡で、この時代のトハリスターンでもっとも重要な仏教遺跡であるという。また、同じくタジキスタン南部にあるヒシュトハテペも仏教僧院の遺跡で、慧超『往五天竺国伝』の骨咄国条にみえる寺院に相当すると思われるが、八世紀中頃にアラブの侵入により滅んだと

される。<sup>③</sup> トハリスターンで出土する仏塔模型が観貨邏國人（吐火羅沙門）の弥陀山が訳出した『無垢浄光陀羅尼経』の内容と一致することは興味深い事実で、この時代の吐火羅国における仏教信仰を物語る物証として貴重なものといえよう。

弥陀山のほかに来唐した吐火羅の仏教者として達磨林磨がいる。達磨林磨は義浄が将来した『根本説一切有部尼陀那』の訳出に、義浄のもとで中天竺国沙門拔努・罽賓沙門達磨難陀らとともにあたった。景龍四年（七一〇）に訳出のなった同経の奥書に「翻経沙門吐火羅大德達磨林磨」と記されている。また、義浄が著した『大唐西域求法高僧伝』巻上には、「観貨速利国人」として仏陀達磨なる人物がみえている。「観貨速利国人」というのはトハリスターンとソグディアナの両地域に関係する出自をもつということであろうか。この人物は益府で出家し、中国国内を遊渉したのち、西方の聖迹を周観し、義浄と那爛陀で会ったあと（ときに年五〇ばかり）、再び北天竺に向かったとある。益州が復置されていたのは武徳元年（六一六）から貞観元年（六一七）までの間なので、仏陀達磨の年齢からみて、益府で出家できたかどうか微妙であるが、誤差の範囲と考えるとすると、中国・西域・天竺を往来する観貨邏人の出家者が存在していた可能性を示唆している。

義浄『大唐西域求法高僧伝』巻上の新羅僧慧輪条には、観貨邏人に関するさらに興味深い話が伝えられている。それによると、慧輪は長安に入って、玄照の西行に侍者として従うことを許され、西国

の聖跡を巡礼したのち、菴摩羅跋国の信者寺にあること一〇年、ここから東辺北方にある觀貨羅僧寺に移り住んだという。この觀貨羅僧寺はもともと觀貨羅人が本国僧のために造るところで、巨富を有し、資産も豊饒で、寺名を健陀羅山茶といった。北方の僧が来たれば、みなこの寺に住して主人となつたという。寺名中にガンダラを意味する「健陀羅」という語が含まれているため、この觀貨羅僧寺はガンダラに造られたとか、トハリスターンに建てられたという意見が出されている<sup>53)</sup>。しかし、慧輪が最初に住んだ菴摩羅跋国は南インドのアマラーヴァティーのことと思われるので、ここから東方北辺に移つた先の觀貨羅山寺は、ガンジス川下流域にあつたとみるべきであろう。仏教聖跡の中心地ブツダガヤの周辺が想定できるのである。

ブツダガヤの周辺にあつたと推定される觀貨羅山寺は、觀貨羅僧でインドに遊歴するものを寄寓させるために、觀貨羅人が建てた寺院である<sup>54)</sup>。觀貨羅山寺の記事のすぐあとには、大覚寺の西に「迦畢試国寺」があり、北方僧が来たればまたここに住したという。大覚寺（摩訶菩提寺）は僧伽羅（セイロン）国王が建立した寺院で、ブツダガヤの菩提樹の北門外にあつた（『大唐西域記』卷八、『大唐西域求法高僧伝』卷下）。中インドのブツダガヤ周辺に觀貨羅山寺や迦畢試国寺があつたとすると、中央アジアの吐火羅（觀貨羅）や迦畢試（カーピシー）国と中天竺の舍衛・ナランダ・ブツダガヤなどを結ぶ仏跡巡礼ルートが浮かび上がってくる。また、義浄が往復と

も上陸港とした東インドの耽摩立底国はブツダガヤの西約四〇〇kmの地にあつたから、觀貨羅人がここから南海や中国をめざすことも可能であつたらう。

七世紀における仏教者の巡礼ルートを考えると、西域の吐火羅人と中インドの舍衛人との間には結びつきが想定できる。胡商もほぼ同じルートを往来したとみられるので、吐火羅人が舍衛人とともに中国に向かい、その途中で日本近海に漂着することはありうることと思われるのである。

#### おわりに

『日本書紀』にみえる吐火羅国人の来歴に関連して、唐代にいたる西域の吐火羅国の歴史、吐火羅国における仏教信仰のことなどを考えてきた。本稿の結論を要約すると、以下のようになる。

一、『日本書紀』によると、六五四年に吐火羅国の男女と舍衛の女とが日向に漂流し、六五七年に觀貨羅国の男女が海見嶋（奄美大島）に漂泊するなど、少なくとも二群の吐火羅（觀貨羅）国人たちが日本に漂着し、筑紫をへて大和の飛鳥宮へ送られた。彼らのうち男性は六六〇年に中国方面へ送還されていったが、残された妻のもとへは、その後も大陸方面から物資の送付などがあつたのであろう。六七五年の正月元日に舍衛の女と墮羅の女が葉および「珍異等物」を天武天皇に献上しているが、ここにみえる「珍異等物」のなかには、新たに西域方面からもたらされた

品々も含まれていた可能性が高い。

二、『日本書紀』にみえる吐火羅については、これを①西域の吐火羅、②西南諸島の吐噶喇列島、③フィリッピン、④ビルマの驃国、⑤タイの墮和羅国、⑥西域のペルシア(波斯)、⑦スマトラ・ジャヴァなどにあてる説がそれぞれ唱えられている。しかし、それらの多くは根拠が薄弱で、通説化している⑧の墮和羅国説にしても、一般によく知られる⑨のペルシア説にしても、中国史料を含めて検討すると、必ずしも十分な説得力をもつものとはいえない。仏典を含めた中国史料にみえる吐火羅・靺鞨は例外なく④の西域の吐火羅をさすもので、この吐火羅は⑤の墮和羅や⑦のペルシア(波斯)とは明確に異なるものとして記述されている。

三、吐火羅・靺鞨とは中央アジアのアム川上中流地域で、現在のアフガニスタン北部を中心とする地方をさす。大月氏・クシャン朝・エフタル・突厥などの遊牧民族が順次この地域を支配したが、トカラの名は四世紀末以降、中国史料に姿をみせはじめる。七世紀前半には西突厥が靺鞨二七国を押さえ、王族の阿史那氏が活国(クンドゥズ付近)に常駐し、吐火羅葉護として統治していた。しかし六二八年以降、西突厥国内が分裂抗争をくりかえし、六五〇年前後にイスラム勢力がトハリスターンに迫り来ると、吐火羅葉護は五五二年に月氏都督に任ぜられるなど、唐への積極的な接近策を展開した。六六一年に唐は西域二六国に

都督府を置くが、これは名目的なもので、やがて葱嶺以西はイスラム軍が席卷することになる。

四、大月氏・クシャン朝の時代にトハリスターンでは仏教文化が隆盛し、大月氏僧が二世紀後半の中国に大乘・小乗経典を伝えた。その後も曇摩難提・弥陀山・達磨秣磨ら吐火羅国出身の訳経沙門が前秦や唐に来て活躍した。義浄の証言によると、中国・西域・天竺を巡礼する靺鞨速利国人が存在したという。また義浄は、靺鞨羅人はインドのブツガヤ周辺に本国僧のために靺鞨羅山寺を造っていたとも伝えている。西域からインドへ、さらには中国へと往来する靺鞨羅人(靺鞨速利国人)の姿が浮かび上がる。

西域の吐火羅国は六四〇年代以降、六四五年・六四七年・六四八年・六五〇年・六五四年・六五七年・六六〇年などに唐へ使者を送った。一方、唐は六五二年・六五八年・六六一年などに吐火羅国に月氏都督府を置いた。このように六五〇年代は西域の吐火羅国と唐とが急接近した時代である。使節の往来と比例して吐火羅国からの商人の往来も急増したことは想像に難くない。

これらの諸点を勘案すると、六五四年・六五七年などに日本へ漂着した吐火羅国人は、西域の吐火羅国人である可能性が高いといえよう。そのような遠いところから来日できるのかという疑問が以前から出されているが、歴史上に残る靺鞨羅僧の動きは西域・インド・中国を股にかけている。ソグディアナのソグド人を中心とする

胡商が隋代・唐代の中国へさかんに往来したことも、近年の研究によって明らかにされた。このような客観的条件からみても、西域の吐火羅人が日向国や奄美大島に漂着し、飛鳥の王都に迎えられたとしても不思議はないのである。

それでは、彼ら吐火羅人たちはどのような集団であり、本来はどこからどこへ向かっていたのであるうか。竹内理三氏は、①彼らは日向に漂着したところから、西方ではなく、南方からやってきたとし、②元来は日本に来る目的ではなく、唐か朝鮮半島に向かう途中であったろう、③妻同伴なので、かりそめに航海したのではなく、遠洋航海の目的で海に浮かんだものらしい、などと述べている。<sup>56</sup> 竹内氏の指摘は十分首肯しうるものであるが、①については異論がある。

後世の例ではあるが、松浦章氏の紹介によると、安政二年（一八五五）正月、日向国心見村に中国の小型商船が漂着した。この船は山東半島東端の石島より出帆し、おそらく江南の蘇州をめざしていたが、「逢難風、船上破損多、其後打續西風而已ニテ」日向国へ漂着したのである。また、同年五月には、同じく山東半島の即墨県から蘇州へ向かう中国の小型商船が「逢難風」、土佐国の浦戸へ漂着したのち、さらに日向国折生迫へ漂流している。これらの例は、外国船の日向国への漂着が、南方からだけではなく、東方にあたる中国山東半島方面からでも、十分起こりうることを示している。

吐火羅人の来日について、井上光貞氏が墮和羅國の遣唐使節が日

本に漂着したと推測していることは前述の通りであるが、内田吟風氏はこれを批判して、『日本書紀』の吐火羅人・舎衛人は文字通りアフガニスタン・インドからの商民か旅行者であるとみて差し支えないと説いた。<sup>57</sup> このほか榎一雄氏は、吐火羅人がわずか三年の間に二回も漂着しているところから、彼らははじめから日本に渡航するつもりで来たもので、漂着とはいいい訳にすぎず、日本の朝廷が手厚い待遇を与えたのは、彼らが商人で珍しい財宝を数多く所有していたからであろうと論じている。<sup>58</sup>

漂流を装ったものかどうかは別にして、榎氏の仮説には興味深いものがある。のちの天平勝宝四年（七五二）に来日した新羅王子金泰廉・新羅貢調使金暄らの一行は、総勢七〇〇名あまり、乗船も七艘という大使節団であったが、正式の使節のほかにも多数の貿易商人が加わっていたと考えられている。<sup>59</sup> この一行は孝謙天皇に拝朝したのち、東大寺大仏への拝礼も許されるなど、例外的な厚遇のもとに帰国するが、正史たる『続日本紀』には商業活動を思わせる記述は一言も書かれていない。天武四年の元日に舎衛女と墮羅女が薬と「珍異等物」を献上しているのも、吐火羅人たちが西域の貴重な文物をもたらしたことを想像させる。彼らが妻のみを残して帰国したのも、商業活動を継続させるための一手段と考えれば納得がゆく。その意味では、彼らは吐火羅人とは称しているが、「観貨速利國人」と称された仏陀達磨のように、トハリスターンとソグディアナの両地に由縁をもつ胡人（胡商）が含まれていた可能性も少なく

ない。<sup>(4)</sup> 森部豊氏によると、西晋時代にはソグド人の交易圏は黄河下流域にまで及んでいたが、山東省青州市にある北斉時代の墓から出土した石板には、墓主と商談をするソグド人らしき胡人が描かれており、この時代には山東の青州にまでソグド商人がやってきたことが確認できるとい<sup>(5)</sup>。このような山東半島などに往来した胡人のうち、吐火羅（トハリスターン）出身の胡商集団が、江南方面へ向けて船舶で航行した際に、暴風のため流されて日本へ漂着したのが、『日本書紀』にみえる吐火羅人であると思われる。

日本にきた吐火羅人が文字通り西域の吐火羅人であったとすると、この事実は、日本と西域の関係史に新たな光を与えることになる。正倉院宝物のガラス製品などに含まれる西域的な要素については、これまでササン朝ペルシアとの関係ばかりが喧伝されてきたが、最近ではそうした見方に対して異論も出されている。西域の吐火羅人が飛鳥の朝廷に来て、「珍異等物」を献上しているという事実は、従来の定説を見直す手がかりとなるかもしれない。ことは飛鳥仏教と西域との関係、飛鳥の石造建築物と西域との関係にまで波及するが、これらについてはまた別の機会に論じたいと思う。

## 注

- (1) 井上光貞「吐火羅・舍衛考」(『井上光貞著作集』一一、岩波書店一九八六年。初出は一九六〇年)二八七～二九〇頁。  
 (2) 『大日本史』卷二四三、吐火羅伝。  
 (3) 河村秀根『書紀集解』(国民精神文化研究所、一九三七年)。

- (4) 飯田武郷『日本書紀通釈』(内外書籍株式会社、一九三〇年)。  
 (5) 内田吟風「吐火羅国史考」(東方学会創立二十五周年記念『東方学論集』東方学会、一九七二年)一三頁。  
 (6) 谷川士清『和訓栞』中卷(名著刊行会、一九七三年)。  
 (7) 『薩隅日地理纂考』(鹿児島県教育会、一九八八年)三二四頁。  
 (8) 『鹿児島県史』第一卷(鹿児島県、一九六七年復刊)九四～九五頁。  
 (9) 藤田元春「琉球と南越」『日支交通の研究』中近世篇(富山房、一九三八年)八七頁。  
 (10) 丸山二郎「吐火羅と舍衛」(『日本古代史研究』大八洲出版株式会社、一九四八年)。  
 (11) 井上光貞注(1) 論文二九二頁。  
 (12) 三宅米吉「ひりつびん群島ノ記」(『文学博士三宅米吉著述集』同刊行会、一九二九年)四六一～四六二頁。  
 (13) 吉田東伍「増補大日本地名辞書」第四卷(富山房、一九〇一年)五八五～五八六頁。  
 (14) 竹内理三「吐火羅人入朝考」(『竹内理三著作集』四、二〇〇〇年。初出は一九二八年)。  
 (15) 井上光貞注(1) 論文。  
 (16) 日本古典文学大系『日本書紀』下(岩波書店、一九六五年)補注、新編日本古典文学全集『日本書紀』三(小学館、一九九八年)頭注、『国史大辞典』第一〇卷(吉川弘文館、一九八九年)、『対外関係史辞典』(吉川弘文館、二〇〇九年)など。  
 (17) 内田吟風注(4) 論文一三頁。  
 (18) 伊藤義教「再々論「吐火羅・舍衛」考」(『東アジアの古代文化』六七、一九九一年)一六二頁。  
 (19) 山本達郎「墮和羅国考」(『史林』二八、一九四三年)。  
 (20) 松本清張「火の路」下(文芸春秋、一九七五年)三三二～三三六頁、同「ベルセボリスから飛鳥へ」(日本放送出版協会、一九七九年)一六六～一六七頁。

- (21) 石原力「奈良時代に來日したペルシア人李密(李密)考」(『東ア  
ジアの古代文化』一七、一九七八年)。  
 (22) 井本英一「古代の日本とイラン」(学生社、一九八〇年)。  
 (23) 伊藤義教「ペルシア文化渡來考——シルクロードから飛鳥へ——」  
(岩波書店、一九八〇年)、同「『日本書紀』にかかれたトカラ人」(『東  
アジアの古代文化』二五、一九八〇年)、同注(18) 論文。  
 (24) 波斯匿王はシャカの時代のコーサラ国の王。舍衛城に住んだ。優波  
斯那はシャカが成道後に最初に説法した五比丘の一人。  
 (25) 岡本健一「日本に來た西域人」(『東アジアの古代文化』一七、一九  
七八年)、高遠五郎「飛鳥と西域」(『東アジアの古代文化』一八、一  
九七八年)など。  
 (26) 榎一雄「『日本書紀』の吐火羅国と舍衛」(『朝日ジャーナル』一九  
八〇年八月一五・二二日合併号)。  
 (27) 以上の吐火羅概論は以下の文献を参考に記述した。椎尾弁匡「親貨  
羅の民族地理年代」(『史学雑誌』二二六、一九二二年)、内田吟風「吐  
火羅国史考」(『東方学会創立二十五周年記念『東方学論集』東方学会  
一九七二年)、加藤九祚「トハリスタンの仏教遺跡」(『シルクロード  
学研究』四、一九九七年)、岩井俊平「トハリスタンにおける地  
域間関係の考古学的検討」(『西南アジア研究』六〇、二〇〇四年)。  
 (28) 岩井俊平注(27) 論文二頁。  
 (29) 桑山正進「トハリスタンのエフタル、テュルクとその城邑」(『オ  
リエント学論集』小学館、一九八五年) 一四一頁。  
 (30) 桑山正進訳注『大乘仏典 中国・日本篇』九、大唐西域記(中央公  
論社、一九八七年) 一二六頁。  
 (31) 桑山正進注(29) 論文一四六頁。  
 (32) 玄奘の出発年については、貞觀元年(六二七)とする史料と貞觀三  
年(六二九)とする史料の両方があるが、桑山正進氏が指摘するよう  
に(桑山注(30) 著書三六〇～三六三頁)、玄奘は碎葉城で六二八年  
に暗殺された西突厥の統葉護可汗に謁見している、貞觀三年出發

だとこれに間に合わないことになる。貞觀「三年」は「元年」の誤写  
と考えるべきであろう。

- (33) 桑山正進注(30) 著書二二八～二二九頁。  
 (34) 桑山正進注(30) 著書二二五～二二六頁。  
 (35) 桑山正進注(29) 論文一四四～一四五頁、同注(30) 著書二六七頁。  
 (36) 桑山正進注(29) 論文四五頁、同注(30) 著書二六七頁。  
 (37) 唐代前期の西突厥・吐火羅の状況および唐との交渉については、内  
田吟風注(27) 論文、嶋崎昌「遊牧国家の中央アジア支配と中国王朝」  
(『岩波講座世界歴史』六、岩波書店、一九七一年) 四〇二～四〇八頁、  
桑山正進注(29) 論文一四五～一四六頁、同注(30) 著書二三〇～一  
三一頁、二六七～二六八頁、三六〇～三六三頁、長沢和俊「東西文化  
の交流」(白水社、一九七九年) 一三一～二四三頁、森安孝夫「興亡  
の世界史〇五 シルクロードと唐帝国」(講談社、二〇〇七年) 一七  
三～一八〇頁などを参照した。  
 (38) 波斯とイスラム軍に関する記述は、以下の文献によった。長沢和俊  
注(37) 著書二四六～二四九頁、前嶋信次「タラス戦考」(『東西文化  
交流の諸相』同刊行会、一九七一年) 一三八～一四〇頁、桑山正進編  
『慧超往五天竺国伝研究』改訂第二刷(臨川書店、一九九八年) 一四  
七～一四八頁。  
 (39) 前嶋信次注(38) 論文一三四頁。  
 (40) 桑山正進注(38) 編著一四七頁。  
 (41) 前嶋信次注(38) 論文一三八頁。  
 (42) 前嶋信次注(38) 論文一四〇～一四一頁。  
 (43) 長沢和俊注(37) 著書二三八頁、森安孝夫注(37) 著書一八〇頁。  
 (44) 内田吟風「唐高宗勅撰西域志校録」(『神戸大学文学会研究』三五、  
一九六五年)。  
 (45) 前嶋信次氏注(38) 論文一三七頁。  
 (46) 桑山正進氏注(38) 編著一四七～一四八頁。  
 (47) 羽溪了諦「西域之仏教」(法林館、一九一四年)、羽田明「東西文化

- の交流」〔中央アジア史研究〕臨川書店、一九八二年。
- (48) 羽田明注(47) 論文三〇七～三〇九頁。
- (49) 椎尾弁匡注(27) 論文、小笠原宣秀・小田義久「要説西域仏教史」(百華苑、一九八〇年)三九頁、鎌田茂雄『中国仏教史』第一卷(東京大学出版会、一九八二年)、同第五卷(一九九四年)、鎌田茂雄『新中国仏教史』(大東出版社、二〇〇一年)。
- (50) 鎌田茂雄『中国仏教史』第二卷(東京大学出版会、一九八三年)一〇〇～一二二頁、同『新中国仏教史』(前掲)五七～五八頁。
- (51) 藤善眞澄「華嚴経伝記」の彼方——法蔵と太原寺——(鎌田茂雄先生古稀記念会編『華嚴学論集』大蔵出版、一九九七年)三二六～三二七頁。
- (52) 蓮池利隆「観貨選僧弥陀山と百万塔」〔仏教学研究〕六四、二〇八年。
- (53) 加藤九祚注(27) 論文。
- (54) 加藤九祚注「仏教の中央アジア(西トルキスタン)伝来と隆盛」(シルクロード学研究)四、前掲)七頁。
- (55) 足立喜六訳注『大唐西域求法高僧伝』(岩波書店、一九四二年)八八頁。
- (56) 竹内理三注(14) 論文三三〇～三三一頁。
- (57) 松浦章「解題」〔安政二・三年漂流小唐船資料〕関西大学東西学術研究所資料集刊、二〇〇八年。
- (58) 内田吟風注(27) 論文一三頁。
- (59) 榎一雄注(26) 論文四四頁。
- (60) 東野治之『正倉院』(岩波書店、一九八八年)二五～三二頁。
- (61) 伊藤丈氏は、『現代語訳一切経 大唐西域求法高僧伝・海東高僧伝』(大東出版社、一九九三年)において、「観貨速利国人」を「観貨羅(トハリスタン) 国などで市を開く速利の人」と訳している。
- (62) 森部豊「四世紀～一〇世紀の黄河下流域におけるソグド人」(鶴間和幸編『黄河下流域の歴史と環境』東方書店、二〇〇八年)。

〔付記〕 本稿は、二〇〇九年一月一八日(水)に関西大学東西学術研究所の研究例会で報告した内容をもとに、一部補訂を加えながらまとめたものである。報告後の質疑応答に際しては、多くの方々から有益なご指摘をいただいたが、なかでも松浦章氏と森部豊氏からは、本稿の結論に影響する貴重な教示を頂戴した。末尾ながら記して、感謝の意を申し述べたい。

# The Tokharians who visited Asuka from the Western Regions

NISHIMOTO Masahiro

飛鳥に  
来た西  
域の吐  
火羅人

In the academic circles of ancient Japanese history, the Tokharians, who drifted to the Japanese shores in 654 and 657, were thought to be the Dvaravadians who lived in a region that is now part of Thailand. Some believed that they were from Persia or the Tokhara Islands. However, in Chinese historical documents, including Buddhist texts, Tokhara was only used to refer to the Tokharians in the Western regions and thus, distinguished them from Dvaravati in Thailand and Persia. It is difficult to believe that the ancient Japanese did not know this.

The Tokharians lived in the upper and middle valleys of the Amu, a region now part of northern Afghanistan. In the first half of the seventh century, the West Turk ruled Tokhara, and the Ashina royal family lived in the Katsu (near Kundus) and governed it. After 628, an insurrection erupted in West Turk and Islamic movements closed to Tokharistan in around 650. Around this time, the Ashina started to aggressively approach Tang. Tokhara vigorously approached Tang in the 650s. Caravans of Tokharian merchants traveled to Tang with the visit of the Tokharian delegate. The Tokharians who reached the Japanese shores are assumed to be some of them.